

複数的な親子

カンボジア・コンポントム州AS孤児院生の生きる親子の観念と実際

西田季里(東京大学大学院総合文化研究科)

人間を取り巻く様々な他者関係には、直接的相互作用によって生成される人間的関係のレベルだけでなく、イデオロギー的公理化を介して遂行される社会的関係も含まれる。子どもは必然的に対面的他者関係の中で生きているが、その直接的相互作用にも、社会的関係の有する観念が入り込んでいる。しかしそうした観念と直接的相互作用との1対1対応が成り立たない時、子どもは対面的他者関係をどのように生きるのか。

本発表では、カンボジアの公立孤児院で生活する孤児院生を対象に、2007年5月~10月に行った観察調査をもとに、孤児院生を取り巻く「親」たち(呼び方に「親」がつく他者たち、「親」という社会的関係で結びつけられる他者たち)と、孤児院生との間に観察される相互作用および、孤児院生たちが持つ親子の観念との齟齬及びそのズレに注目する。

カンボジアの公立孤児院は、両親がいない天涯孤独児の保護施設というよりむしろ、貧困世帯の子どもに教育の機会を保障する福祉的教育施設という意味合いが強い。よって、フィールドとなった孤児院の入所生たちの多くは、(両親の離婚や片親の死別による)母子/父子世帯の子どもであったり、或いは両親がいるが貧困世帯の子どもであったりする。そのため、孤児院生たちが「親」と呼ぶ他者は、実父母(生殖的な父母)に加え、乳母(孤児院で生活集団を統率する職員)、義父母(主に海外にいて孤児院に養育費を寄付する援助者)があり、それぞれの親との間には、異なる「親子」の関わりが観察される。すなわち、大きく分けて、実父母の間には生殖の「事実」が、乳母との間には毎日の生活の世話・養育が、義父母との間には経済的な扶養による関わりが見出される。

その一方で、孤児院生の語る「親子」の関わりは、教科書的なそれに近く、「親子は共に暮らし、親は子を生み、養育し、扶養し、子は将来的にその恩に報いて親を扶養する」というものであった。実際の親役割が複数の他者に分かれて担われている状況に対し、孤児院生たちは、あくまで実父母を正統な「親」と見なし、「彼らを将来的に扶養するために現在において孤児院にいる」、という考えを口にする。一方、日常的に生活を共にし、孤児院生をケアする乳母たちは、孤児院生との部分的な親子関係に対して、「乳母は孤児院生に対し、本当の子どものように愛情を注がなければならない」、「乳母の行いが悪いと子(孤児院生)の行いも悪くなる」などその影響力を大きくみながらも、「孤児院生は貧困世帯の出で育ちが悪く可愛くない」、「大人になっても彼らは私たちが扶養してくれない」と、疎遠な感情や不満を口にする。

本発表では、何が正統な「親子」であるかについての個人の選択や、単一の「親子」というユニット内部における歪みや欠如にフォーカスするのではない。孤児院生たちは自分の出自をどこに置くか、なにが正統的な親子であるか、すなわちkinshipについては揺らぐが、生殖の事実親子の正統性を見る。しかし、孤児院生たちの現在における実際の生活において「正統な」親は養育も扶養もせず、そうした「親役割」と見なされていることは、非正統の「親」によって担われている。孤児院生たちの生活はまさに、そうした非正統的な親子関係と共に営まれているのであり、そこにはもちろん不満や矛盾や理屈付けがある。

よって、本発表の特色とは、「親子」という社会的関係が含む観念が、直接的相互作用の別とともに、異なる他者へ、部分的に振り分けられていくさま、しかし一方でそれらは1つの「親子」という統合的観念の下で微妙に重なり合うように生きられているさまの描出を試みるという点であり、つまり何が正統かという観念ではなく、観念と実際の直接的相互作用との間で生きている、孤児院生達の営みへの関心である。

【 子ども、カンボジア、心理人類学、関係 】